

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：34507

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12504

研究課題名（和文）文化的感受性を備えたりカバリー志向の地域精神看護援助モデルに基づいた実践の評価

研究課題名（英文）Evaluation of a culturally sensitive recovery-oriented nursing care model in community psychiatric nursing

研究代表者

松岡 純子（Matsuoka, Sumiko）

甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・教授

研究者番号：40375621

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：研究目的は、文化的感受性を備えたりカバリー志向の地域精神看護援助モデルの研修プログラムを開発し、モデルに基づいた実践の効果を評価することである。モデルについての小冊子と研修プログラムを開発した。精神科訪問看護師7名に各1名の利用者に4カ月間、モデルを活用してもらった。活用期間後に看護師にインタビューを行い、利用者にはアンケートを実施した。分析の結果、4カ月の活用期間では、利用者は自身の変化や支援の変化を感じないことが多かったが、看護師は自身の価値観に目を向け、精神医療文化の影響を確認し、リカバリー志向の実践に安定して取り組み、利用者や利用者を支える人との相互作用からエンパワメントされていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文化的感受性を備えたりカバリー志向の地域精神看護援助モデルの4カ月の活用による主たる効果は、看護師が自身の価値観や傾向に目を向け、そこに精神医療文化の影響を確認し、リカバリー志向の価値への転換を促進することであった。看護師にとって、自身の傾向に直面化することやこれまでの価値観と葛藤しながら価値の統合に向かうことは痛みを伴うが、利用者や利用者を支える人の相互作用の中でエンパワメントされることがその過程を後押しすることが確認できた。伝統的精神医療文化の影響が強い環境でも、モデルを活用してリカバリー志向の実践に取り組む看護師が増え、利用者のパーソナルリカバリーを支える支援が普及することが期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the study is to develop a training program for a culturally sensitive recovery-oriented community psychiatric nursing care model and to evaluate the effectiveness of model-based practice.

A model brochure and training program was developed. Seven visiting psychiatric nurses were asked to use the model for 4 months, with 1 user each. After the period of use, the nurses were interviewed and the users were given a questionnaire. As a result of the analysis, during the 4-month utilization period, users often did not feel any change in themselves or the nurse's care, but nurses turned their attention to their own values and the influence of mental health culture. , stably engaged in recovery-oriented practices, and were empowered by interactions with users and those who supported them.

研究分野：精神看護学

キーワード：地域精神看護 文化的感受性 リカバリー 看護援助モデル

1. 研究開始当初の背景

精神保健医療の地域移行に伴って精神科訪問看護のニーズが高まっており、新たに取り組む看護師が増加すると想定される。精神保健医療では、病気や障害があってもなお、その人らしく充実した生き方を目指すプロセスを指す「パーソナルリカバリー」の概念が普及している。精神科訪問看護においてもリカバリー志向の実践が目指される中、新たに精神科訪問看護に取り組む看護師がリカバリー志向の実践を身につけることを促進する看護援助モデルの開発が必要であると考へた。そこで先行研究において、5年以上の精神科訪問看護の経験をもち、リカバリー志向の実践をする看護師 21 人へのインタビュー、訪問看護場面の参加観察、そして文献検討に基づいて「文化的感受性を備えたりカバリー志向の地域精神看護援助モデル」を開発した (Matsuoka, 2021; Matsuoka, 2022)。

「文化的感受性」とは、施設中心の精神看護文化や看護師がもつ社会文化的価値観を客観視し、それらをいったん脇において複数の視点からものごとを捉える力を指す。精神保健専門職は無意識のうちに精神障害をもつ人への偏見や優位性を身につけており、これらを繰り返し客観視することができないと、リカバリー志向の支援は見せかけだけのものになる。本研究では、文化的感受性をリカバリー志向の支援の基盤となるパートナーシップの構築や利用者主体の対話を可能にするために看護師にとって不可欠な能力として捉えている。

文化的感受性に焦点を当てたりカバリー志向の看護援助モデル開発は、以下に述べる研究成果から導かれた。精神障害者のリカバリーを促す看護援助に関する申請者らの研究 (岩崎ら, 2007) では、リカバリーが全人的な回復の過程であることが示された。そして、地域精神医療への移行を終えたデンマークの地域精神科看護師を対象とした研究 (松岡, 2010) で、「病気や治療について看護師から質問せず、当事者の語りを待つ」という態度が示され、当事者主体の対話や、病いと共に生きてきた体験の語りの聴き手になる看護師の役割の重要性が示唆された。また、我が国の精神科訪問看護利用者が求める看護援助として、「価値判断を加えずに聴く態度」が抽出され、看護師は自分が影響を受けている精神医療文化や社会文化的価値観を客観視する文化的感受性を備えている必要があることが示唆された (松岡, 2013)。

「文化的感受性を備えたりカバリー志向の地域精神看護援助モデル」を開発する過程で、内容は変わらないが構造が異なる仮モデルを精神科訪問看護の経験が 2 年未満の看護師 8 人に 2 カ月間活用してもらったところ、実践のための記録用紙や研修プログラムの開発と長期の実践による効果測定の必要性が示された。

そこで、「文化的感受性を備えたりカバリー志向の地域精神看護援助モデル」に基づいた実践を支える記録用紙及び研修プログラムの開発と、モデルに基づいた看護実践の効果を評価することを目的として、本研究に取り組むことにした。

2. 研究の目的

本研究は、「文化的感受性を備えたりカバリー志向の地域精神看護援助モデル」の実践を支える記録用紙及び研修プログラムを開発し、そして本モデルに基づいた看護実践の効果を評価することを目的とする。

3. 研究の方法

1) 文化的感受性を備えたりカバリー志向の地域精神看護援助モデル

モデルは、精神医療文化を客観視する文化的感受性に基づく「看護師自身の振り返りの層」、利用者の立場で体験を理解する文化的感受性に基づき、専門性を差し控えることによって利用者を尊重する「看護師 - 利用者間のケア層」、複数の人の視点を受け入れる文化的感受性によ

て可能性に開かれた態度を維持する「連携と協働によるケア層」という3層が相互に影響し合う構造をもつ (Matsuoka, 2021; Matsuoka, 2022)。

2) 記録用紙及び研修プログラムの開発

看護援助モデルの研修やリカバリー志向の支援プログラムに関する文献をもとに研修プログラム案を作成し、リカバリー志向の看護記録用紙を参考にして記録用紙案を作成した。これらを精神科訪問看護の経験豊富な看護師と地域精神看護に関する研究に取り組んだ経験をもつ精神看護学領域の大学教員に個別に提示し、得られた意見に基づいて修正した。その後、精神科訪問看護の経験が2年未満の看護師に研究協力の同意を得て、約1時間の研修に参加してもらい、研修プログラムと記録用紙についてのグループインタビューを行った。インタビュー内容は逐語録に起こし、質的帰納的に分析した。分析結果に基づいて研修プログラムと記録用紙を修正した。

3) モデルの活用を通じた看護実践の評価

(1) 対象者

精神科訪問看護に取り組む訪問看護ステーションの施設長に、研究の概要、研究参加により期待される利益及び不利益等を文書と口頭で説明し、対象候補者となる訪問看護師を紹介してもらった。対象候補者に、研究に関する説明を文書と口頭で行い、書面で同意を確認した。その際、倫理的配慮を遵守した。各看護師に対して研究参加による病状悪化のリスクが少ない利用者を対象候補者として紹介してもらい、研究に関する説明を文書と口頭で行い、書面で同意を確認した。その際、倫理的配慮を遵守した。

3) データ収集方法

(1) 看護師へのインタビュー

研究対象者である精神科訪問看護師にモデルに関する90分のオンライン研修を実施し、小冊子を手元において4カ月間1名の利用者を対象として訪問看護の実践でモデルを活用してもらった。活用期間中いつでも相談をしてほしいことを伝え、連絡先を伝え、研究者からも連絡をメールで確認をした。

活用期間終了後、看護師 zoom を用いてオンライン半構造化インタビューを個別に行い、看護師自身の変化や看護師が認識する利用者の変化、看護師と利用者の関係性の変化等について確認した。インタビューは同意を得てICレコーダーに録音した。

(2) 利用者へのアンケート

活用期間後に対面あるいはオンラインでの半構造化インタビューを計画していたが、すべての利用者から辞退したため、アンケート用紙を看護師に渡して利用者に聞き取る形式での協力を依頼した。看護師が聞き取りによるアンケートでは利用者の返答にはバイアスがかかるため、「看護師と共に振り返った利用者の支援への思い」と「利用者とともに利用者の希望や支援への思いを振り返る機会をもった看護師の感想」についてのデータとしてとり扱った。アンケートでは、利用者の希望、看護師は利用者の希望に沿った支援をしているかどうか、活用期間の看護師の支援に変化があったかきいた。看護師にも、利用者と一緒に振り返る機会をもって感じたことについて記載してもらった。

7) データ分析方法

(1) 看護師へのインタビュー

インタビューデータは逐語録におこし、精読した。看護師へのインタビューデータから、看護師が認識した看護師の変化、看護師が認識した利用者の変化、看護師が認識した看護師と利用者の関係性の変化に関する部分を、一つの意味内容毎に区切って抽出し、意味が明確になるような簡潔な一文で表現し、コードとした。意味内容の類似性に基づいてコードを集め、共通する意味を表すコードを命名した。このカテゴリー化を繰り返し、カテゴリーを抽出した。カテゴリーの関係性を検討し、構造化した。

(2) 利用者へのアンケート

「看護師の支援への利用者の思い」と「アンケート聞き取りについての看護師の感想」という視点で、アンケートの記載内容の類似する記載内容をまとめて整理した。

8) 倫理的配慮

研究参加者および対象となった利用者、意思の尊重、プライバシー保護の遵守、本研究以外にデータを用いないことを口頭と文書で説明した上で研究参加の同意を得た。研究代表者の所属する大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

1) 研修プログラムと記録用紙を含む冊子の作成

研修プログラム案と記録用紙案を精神科訪問看護の経験豊富な看護師 1 名と地域精神看護に関する研究に取り組んだ経験をもつ精神看護学領域の大学教員 2 名に個別に提示して意見を求め、得られた意見に基づいて修正した。その後、精神科訪問看護の経験が2年未満の看護師3名に研究協力の同意を得て、約1時間の研修に参加してもらった。その後、3名の協力者に対して研修プログラムと記録用紙についてのグループインタビューを行った。インタビュー内容は逐語録に起こして質的帰納的に分析した。分析結果に基づいて、用語の説明の追加など研修プログラムを修正した。具体的な実践場面が記録できる用紙を作成した。モデルの内容を示した図表や、具体的な援助内容を示したリスト、実践場面の記録用紙を持ち運びしやすい小冊子にまとめた。

2) モデルの活用期間後の看護師へのインタビューの分析結果

研究協力者は7名で、平均年齢は42.4歳、研究開始時の平均精神科訪問看護経験期間は39.1カ月であった。利用者7名はすべて女性で、平均年齢48.6歳、独居2名、家族と同居5名、診断名は統合失調症3名、自閉スペクトラム障害2名、双極性障害1名、持続性気分障害1名であった。

インタビューでの看護師の語りは、<1.モデルへの賛同>、<2.自己の価値観や傾向への気づき>、<3.これまでの価値観との葛藤>、<4.異なる価値の統合>、<5.利用者への看護実践の工夫と変化>、<6.利用者を支える人との連携への取り組み>、<7.利用者や利用者を支える人との相互作用によるポジティブな感情>という7つのカテゴリーで表された。

<1.モデルへの賛同>は、看護時はモデルの内容に同意し、看護実践の指針としたいと感じたことを表している。<2.自己の価値観や傾向への気づき>は、看護師がモデルの研修と活用を通して、看護師自身の実践を振り返ることを意識し、自分の価値観や傾向について気づきを得たことを表している。<3.これまでの価値観との葛藤>は、モデルに賛同する一方で、看護師の中にはモデルの内容と現実とにギャップがあると感じることもあり、自分の傾向やこれまでの価値観を変えることに苦痛を感じていたことを表している。<4.異なる価値の統合>は、活用期間を通してどちらも否定することなく統合していきたいという方向性を看護師が見出していたことを表している。<5.利用者への看護実践の工夫と変化>は、利用者の価値観を尊重し、強みに焦点を当てて、自らの対話の仕方や支援の仕方をリカバリー志向に変化させたことを表している。<6.利用者を支える人との連携への取り組み>は、看護師は、援助チーム内外の支援者及び家族と連携する中で、利用者だけでなく看護師もつながることで利用者も看護師も心強く感じたことを表している。<7.利用者や利用者を支える人との相互作用によるポジティブな感情>は、利用者が生活を整えて力を発揮していった変化を嬉しく感じたり、利用者を支える多職種との連携により心強さを感じたりするなど看護実践による利用者や利用者を支える人の反応によって看護師に肯定的な感情が生じたことを表している。

カテゴリーの関係性を検討したところ、<1.モデルへの賛同>、<2.自己の価値観や傾向への気づき>、<3.これまでの価値観との葛藤>、<4.異なる価値の統合>は相互に影響し合う関係性と考えられた。これらは【モデルの活用により看護師の内面で起こる変化】を示していると考えられた。また、<5.利用者への看護実践の工夫と変化>と<6.利用者を支える人との連携への取り組み>と<7.利用者や利用者を支える人との相互作用によるポジティブな感情>は相互に影響し合う関係性であり、これらは【看護実践の中での利用者や利用者を支える人との相

相互作用】を表していると考えられた。

【モデルの活用により看護師の内面で起こる変化】と【看護実践の中での利用者や利用者を支える人との相互作用】も相互に促進し合う関係性と考えられた。

3) モデルの活用期間後の利用者へのアンケートの分析結果

7名中5名の利用者の協力が得られた。「看護師の支援への利用者の思い」と「アンケート聞き取りについての看護師の感想」という視点で整理した内容を示す。

(1) 看護師の支援への利用者の思い

「看護師はあなたの『自分らしい充実した生活』を応援してくれていますか」という項目に対して、5名全員が「はい」と答えた。「看護師はあなたの強みや希望を大事にして支援していると感じますか」という項目に対して、4名の利用者が「はい」と答えた。「最近4カ月の期間で、看護師の関わり方やあなたとの関係性に変化がありましたか」という項目に対して、1名の利用者が「はい」と答えた。

(2) アンケート聞き取りについての看護師の感想

アンケートの聞き取りを行った看護師5名の感想の記述内容について、類似するものをまとめた結果、「利用者の答えづらさを心配した」、「利用者のもつ力を再確認した」、「利用者の気持ちを知ることができた」、「利用者に強みを伝えられた」、「信頼関係が強まりを感じた」という5つの内容に整理できた。

5. 考察

研究参加したすべての看護師がモデルへの賛同について語ったことから、モデルは看護師に受け入れられやすいものであった。新たに訪問看護に取り組む看護師にとって実践の概要と具体的なケアリストを示した本モデルは指針となると評価され、経験を重ね、すでにリカバリー志向の実践を心掛けている看護師にとっても、自らの実践を確認することに活用されていた。本モデルの対象としては、訪問看護経験年数によらず、すべての訪問看護師に活用可能なものと考えることができた。

看護師の認識と実践の変化をモデルの3つのケア層に照らし合わせてみると、すべてのケア層の実践がされていた。モデルは具体的な実践を数多くケアリストを含んでいるため、リストの中の何らかの実践をすることが可能となっている。

4カ月の活用では、利用者にとっては看護師の支援の大きな変化を感じ取ることは少なかった。モデルの活用は、看護師がリカバリー志向の実践に安定して取り組むことを支えるものであったと言える。看護師の振り返りを促進し、価値の転換を支えることが本モデルの最も特徴的な効果であると考えられる。

モデルの活用によって、モデルの実践内容をすぐに取り入れる看護師もいるが、葛藤を感じながら時間をかけて統合していく看護師もことを理解しておく必要がある。看護師のこれまでの経験や伝統的な精神医療文化の価値観をどのように受け止めているかということによって異なると考えられる。看護師がそれぞれのペースでリカバリー志向の価値を取り入れ、自身の価値として統合していくことを保障することが重要である。

今回は新型コロナウイルス感染症のパンデミック期間であったこともあり、利用者へのインタビューが叶わなかった。今後、研究者から利用者へインタビューを行い、モデルの効果について評価する研究が必要である。

文献

Matsuoka, S (2020). Recovery-oriented nursing care based on cultural sensitivity in community psychiatric nursing. *International Journal of Mental Health Nursing*, 30(2), 563-573.

Matsuoka, S (2022). Development of a culturally sensitive recovery-oriented nursing care model in community psychiatric nursing. *the Journal of Psychosocial Nursing and Mental Health Services*, doi.org/10.3928/02793695-20221202-01

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Sumiko Matsuoka	4. 巻 30
2. 論文標題 Recovery-oriented nursing care based on cultural sensitivity in community psychiatric nursing	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Mental Health Nursing	6. 最初と最後の頁 563-573
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/inm.12822	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Sumiko Matsuoka	4. 巻 0(0)
2. 論文標題 Development of a culturally sensitive recovery-oriented nursing care model in community psychiatric nursing.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 the Journal of Psychosocial Nursing and Mental Health Services	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3928/02793695-20221202-01	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Sumiko Matsuoka, Noriko Marumoto, Yuki Maura
2. 発表標題 Modification of a study program on a culturally sensitive recovery-oriented nursing care model in community psychiatric nursing after a pretest and interview survey
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	丸本 典子 (Marumoto Noriko) (00336843)	甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・講師 (34507)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	吉原 未佳 (Yoshihara Mika) (10765100)	甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・助手 (34507)	
研究 分 担 者	眞浦 有希 (Maura Yuki) (40803135)	大阪歯科大学・歯学部・特任講師 (34408)	
研究 分 担 者	堀川 容岐 (Horikawa Hiroki) (40963591)	甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・助手 (34507)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関